

ここで, degree H とは *hardly* が表す度合, すなわち100%に極めて近い否定度のことである。

この事情が分かりやすい例を見てみよう。

- (3) In those days, newspapers were full of *hardly surprising news*.

イタリックの部分は「ほとんど驚くにあたらないニュース」という意味であるが, 次のような構造をもっている。

- (4) [[[*hardly*]_{ADV} [*surprising*]_{ADJ}]_{AP} [*news*]_N]_{NP}

意味と構造の両面から, *hardly* が *surprising* を修飾していることが明らかであるが, 「驚愕(という段階性をもった概念)の程度が非常に低い」ということなので, (1), (2)に合致している。次に類例を挙げておく (Robert Rolf 氏 (私的照会) による)。

- (5) She was, to put it bluntly, very homely. But she was rich and, needless to say, found herself surrounded by *hardly unenthusiastic* suitors.
 (6) The work was described to them as nearly impossible to accomplish, but, with their extensive experience they knew it was rather routine. They immediately set to the *hardly impossible* task.

次節以下, 大方の辞書等に見られる分類の意味が, それぞれ(1)の意味に還元できるか否かを順次検討して行きたい。その際, 「(1)の意味をもつ」などと言う代わりに, 略式に, 「degree H である」などという表現を使うこともある。

2. ALMOST NOT

hardly が辞書等において ALMOST NOT (SCARCELY など) の意味をもつと分類される例文には次のようなものが含まれる。

- (7) He *hardly ever* goes to bed before midnight. (OALD)
 (8) *Hardly anybody* came to the meeting. (OALD)
 (9) Bob takes *hardly any* exercise.⁴
 (10) There was *hardly anywhere* to go. (COB)

まず, *hardly ever* は, 通例, イディオム扱いされているが, 「めったにない」という意味をもち, *almost never* (=very seldom) で書き換え可能である。「めったにない」ということは, 「頻繁さ(という段階的概念)の度合, すなわち頻度が極端に低い」ということであるが, それは「頻度が(最小値である)0回に極めて近い」ということであるので, この *hardly* は degree H を表していることが分かる。ちなみに, この *hardly* が *ever*

を修飾していることは、(7)から ever を除去した(11)において hardly が goes to the meeting を修飾する読みが存在しないことから示唆される。

(11) He hardly goes to the meeting.⁵

次に、(8)–(10)で(7)の ever に相当するのは any(-) であることは明らかであろう。hardly any(-) (ほとんど…ない) の書き換えは almost no(-) であるので、hardly は、「量(数量あるいは分量)(という段階的概念)が(最小値である)無に極めて近い」ことを表していることが読みとれる。やはり、hardly は degree H である。

続いて次例について考えてみよう。

(12) I'm so tired that I can hardly walk. (OALD)

(13) I need hardly say that I am innocent. (OALD)

(12)では hardly が能力を表す can を修飾し、能力(の程度)が非常に低いことを表している。⁶ また、(13)では必要性を表す need を修飾し、必要度が非常に低いことを表している。このことは、例えば(12)が次のようにパラフレーズできることから分かる。

(14) I'm so tired that I am almost incapable of walking.

さて、(12)、(13)には被修飾要素が表面的に現れているが、次例はそうっていない。

(15) I hardly know him. (Thomson *et al.*)

(16) I hardly believe he will go. (LH)

(17) I hardly love him.

ここでは認知的・心理的状态(state)を表す know, believe, love という動詞が現れているが、その状態の強さ、つまり認知的・心理的量が内在的に問題となる意味内容をもっていると考えられる。⁷ これらの文では、それぞれ、熟知度、確信度、愛情の深さが今問題としている強さ(量)である。その強さに関しては無標である場合が少なくないが、程度の副詞を用いてその強弱を明示することももちろんできる。

(18) I know him well.

(19) I firmly believe it.

(20) I love you very much.

そして、hardly は「その内在的な強さ(という段階的概念)の度合いが極めて低い」ことを指し示していると思われる。このことは、「ほとんど知らない／思えない／愛していない」

という意味が「知らない／思えない／愛していないにほぼ等しい」と言い直すことができることから明白である。よって、今見た *hardly* も degree H である⁸。

同様に、次の諸例でも内在的な段階的概念が問題となる。

- (21) She is hardly happy.
- (22) He was hardly affected by the financial crisis.⁹ (Hornby)
- (23) He hardly mastered English.

(21)は状態を表しているが、幸福度が問題となっている。そして、「その度合が大変に低い」、つまり、「彼女は幸せだなんてとても言えない」という意味である。(22)は活動 (activity) を受動態で表現したものであるが、影響される程度の低さを表している。よって、「彼はその財政危機によってほとんど影響を受けなかった」という意味になっている。(23)は完成 (accomplishment) 動詞を含み、習得度が極低いことを表している。「彼は英語を全く習得していないようなものだ」といった意味をもつ。ここでも、*hardly* は degree H を表している。

(15)–(23)では内在的量が不可算的であったが、活動動詞が用いられている次の諸例ではそれが可算的である。

- (24) I've hardly slept at all this week. (Swan)
- (25) He has hardly moved all day. (Alexander)
- (26) He has hardly studied this term. (LH)
- (27) It hardly rained at all last summer. (Thomson *et al.*)

これらの文の可算的量は、活動量のことであり、例えば、時間、距離、頁数などの単位を用いて(ある程度)数量化できる。そして、その量が極めて少ないという意味である。¹⁰

以上、ALMOST NOT という辞書的意味での *hardly* が degree H の意味であることを示した。

3. PROBABLY NOT

hardly は PROBABLY NOT (WITH LITTLE LIKELIHOOD など) という辞書的意味を与えられることがある。まず例を見ることにしよう。

- (28) He will hardly incriminate himself. (COL)
- (29) He can hardly have arrived yet. (OALD)
- (30) They are hardly likely to come at this late hour. (LH)

これらの文は、*probably...not* (たぶん…ない) を用いてパラフレーズできる。

- (31) Probably, he will not incriminate himself.
 (32) Probably, he has not arrived yet.
 (33) Probably, they will not come at this late hour.

このパラフレーズの関係から見ると、ここでの hardly の意味は PROBABLY NOT であると思えるかもしれない。が、以下でこの用法の hardly も degree H に還元できないか検討してみる。

最初に注意すべきことは、hardly を含む文が probably...not でパラフレーズされるのは、真偽判断のモダリティ (modality) 表現である予言を表す will, 可能性を表す can, 蓋然性を表す (be) likely など (以下、蓋然性の法助動詞等と呼ぶ) が文中に存在する場合に限られていることである。¹¹ (29)と違って、(12) (下に再掲) の場合の can は能力を表しているが、probably...not によるパラフレーズが成り立たない。¹²

- (12) I'm so tired that I can hardly walk.
 (34) I'm so tired that probably I will not walk.
 (35) I'm so tired that probably I cannot walk.

(34)も(35)も(12)の意味を正しく反映してはいない。(34)は(29)と(32)に倣っており、(35)は単に hardly を probably...not で代置しただけである。) また、そもそも(32)も(33)も(29)、(30)の hardly を probably...not と入れ換えただけでは出てこないものである。したがって、HARDLY = PROBABLY NOT という等式は棄却せざるをえない。¹³

次に、価値判断のモダリティの副詞は通例文頭に位置するが、否定表現を伴っている場合であっても主語・助動詞倒置は起こらない。しかし、hardly が (否定構成素前置によって) 文頭に生じる場合には倒置が起こる。¹⁴ 次の(b), (c) の文法性が正反対になっているのはこのためである。¹⁵

- (36) a. Surprisingly, he will not come tonight.
 b. Not surprisingly, he will come tonight.
 c. *Not surprisingly will he come tonight.
 (37) a. He will hardly come tonight.
 b. *Hardly he will come tonight.
 c. Hardly will he come tonight.

さらに、probably などの真偽判断のモダリティの副詞の場合には否定辞を前置すること自体が不可能であるし、それに加えて主語・助動詞倒置が起こっていてもやはり非文が生じてしまう。したがって、当該の hardly とはふるまいが違う。

- (38) a. Probably, he will not come tonight.

- b. *Not probably, he will come tonight.
 c. *Not probably will he come tome tonight.

このことから、hardly 自体は（とりわけ、真偽判断の）モダリティ表現ではないことが示唆される。

ついでながら、本稿の分析では hardly が degree H を表すと考えているが、そうすると、hardly が準否定語として(36) b の not の位置に生じても不思議はない。

- (39) a. Hardly surprisingly, he will come tonight.¹⁶
 b. *Hardly probably, he will come tonight.

(a)は(36) b が許容されるのと同じ理由で許容され、(b)は(38) b が不可能であるのと同じ理由で不可能であると考えるのが順当であろう。¹⁷

さて、hardly が直接 PROBABLY NOT を表しているわけではないにもかかわらず、なぜ、表面的にはあたかもそうであるように扱われるのであろうか。それを探るために、(28)–(30)を分析的にパラフレーズしてみよう。ただし、構造は極めて概略的なものである。

- (40) [_{S₂} It will hardly be the case that [_{S₁} he will incriminate himself]]¹⁸
 (41) [_{S₂} It can hardly be the case that [_{S₁} he has already arrived]]
 (42) [_{S₂} It is hardly likely that [_{S₁} they will come at this late hour]]

S₂ の will, can, (be) likely はどれも（一種の）蓋然性を表しているが、その蓋然性を hardly が degree H で修飾している。よって、文全体の意味は「S₁ の生起の可能性はかなり低い」ということになる。この意味が直観的には(31)–(33)と同義的であることは分かるが、より明示的にそれを示す必要がある。

そこで、さらに解体したパラフレーズをしてみることにする。

- (43) [_{S₃} It will be almost the case that [_{S₂} it is not that [_{S₁} he will incriminate himself]]]
 (44) [_{S₃} It can be almost the case that [_{S₂} it is not that [_{S₁} he has already arrived]]]¹⁹
 (45) [_{S₃} It is almost likely that [_{S₂} it is not that [_{S₁} they will come at this late hour]]]

これらの論理的パラフレーズには ALMOST NOT(すなわち、degree H)に相当する almost ...not が表れているが、almost は S₃ の主節に残り法助動詞等を修飾し、not は S₁ を否定する役割を担っている。いわば、分身の術といったところである。S₃ の主節は「蓋然性がかなり高い」ことを表しているので、S₃ 全体の意味は [[[S₁ が生起する] S₁ ことは

ない]s₂ という可能性がかなり高い]s₃, つまり, 「S₁ は起こらないだろう」ということになる。そして, S₃ の主節が(31)–(33)の *probably* に対応し, S₂ 全体 (の圧縮したもの) がそこから *probably* を除いた部分に対応する。このように分析すると, 当該の *hardly* も degree H に戻して考えることができる。すなわち, *hardly* そのものがモダリティであるのではない。*hardly* がモダリティである蓋然性の法助動詞等を修飾する結果, 典型的なパラフレーズに *probably...not* が用いられるだけのことである。

さて, ここで本節のここまでの議論に付け加えなければならないことがある。それは次のような文に関することである。

- (46) He is hardly an idiot.
 (47) He hardly intends to attend the party.

これらの文には, 蓋然性の法助動詞等が含まれていない。にもかかわらず, 蓋然性の低いことを表していて, 次のように言い換えることができる。

- (48) It is unlikely that he is an idiot.
 (49) It is unlikely that he intends to attend the party.

It is unlikely はモダリティ表現であるので, *hardly* 自体がモダリティであるという反論が出てくるかもしれない。しかし, 上述のことに加えて, さらに別な理由でこの反論は成立しないのである。その理由は, *It is unlikely* と *probably...not* の蓋然性とを比較してみると分かるように, (28)などの方が(46)などよりも蓋然性が幾分高いということである。すなわち, 例えば(46)などの *hardly* を *probably...not* で置き換えても, (48)以上に適切なパラフレーズにはならない。

- (50) Probably, he is not an idiot.

しかも, こういった蓋然性の差異が生ずる根拠がきちんとあるのである。

次にその根拠について考えてみることにする。まず, 蓋然性に関して無標の平叙文が二義的であることに注目する必要がある。例えば, (51)は(52)のどちらをも意味しうる。

- (51) He is an idiot.
 (52) a. It is a fact that he is an idiot.
 b. I think that he is an idiot.

(a)の読みは「報告的陳述」(つまり, 事実の陳述), (b)の読みは「断定的陳述」(つまり, 意見の陳述)と呼ばれる (cf. 中右(1984 a), Kiparsky and Kiparsky (1971))。今問題となるのは後者である。ここで, *I think* の部分はモダリティを表している。²⁰ この部分は(51)

のように顕現しない場合と、(52) b のように顕現する場合とがあるが、(46)は前者の例である。(46)を後者のようにパラフレーズすると次のようになる。

(53) I think it unlikely that he is an idiot.²¹

この文は(48)と同義である。とりわけ、モダリティを表す I think it unlikely の部分と、(48)の It is unlikely の部分は等価である。したがって、(46)と(47)の hardly は、モダリティである I think の部分を修飾し、断定度が非常に低いという意味を表していると言えよう。そして、(46)や(47)の場合には、そのモダリティの部分が意味上は存在しているにもかかわらず、音形上は顕現していないと考えるのである。

(46)と(47)に関するここまでの議論が正しいとすると、これらの文は、hardly 自体がモダリティとして蓋然性(の低さ)を表すという考え方を裏づける証拠とはなりえないことになる。しかも、hardly は degree H を表すという仮説も支持される。

4. ONLY JUST

本節では、hardly が辞書等で ONLY JUST という意味に分類される例を見てみよう。

(54) He has hardly started studying.

(55) A year had hardly passed. (West)

hardly がこの意味で用いられる場合には、これらの文は次のように書き換えることができる。

(56) He has only just started studying.

(57) A year had only just passed.

それぞれ、「彼は勉強を始めたばかりだ」、「一年がぎりぎり過ぎたばかりだった」という訳が可能である。²²

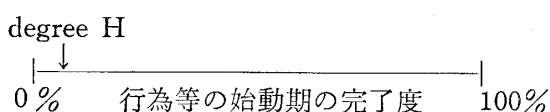
(54)は、「開始 (start) という行為が始まるには始まったが、(調子が上がるほどに) 開始しきったとはとても言えない」、すなわち、「開始という行為の完了した程度は極低い」といった意味をもっている。(55)では経過 (pass) という過程 (process) が問題となっているが、「365日を超える日数が経過したが、その超過日数は(例えば)せいぜい数日といった程度であり、何週も何ヶ月もというわけではない」といったことを意味している。例えば、XさんがYさんに教えてもらったピクルスを作ることにしたとしよう。そのピクルスはおいしく食べられるようになるには約一年かかる。一年が過ぎたばかりの頃に試食してみたら、まだ十分に漬っていないかった。そして、そのことを後日XがYに伝えた。このような状況で、Yが(55)を(57)の読みで使える。今見たような、行為等が起こりきっていないと知覚される時期を「始動期」と呼ぶことにすると、文の表す行為等に関して始動期を想定できる場合に限って、hardly が当該用法で用いられうると言える。と言うことは、例えば、試

験に合格するということには始動期がないので、次例は、「合格したばかりだった」という意味にはならないはずであるが、そのとおりである。

(58) He had hardly passed the exam.²³

まとめると、当該の hardly は行為等の始動期の完了度 (perfectiveness) を修飾し、その度合が極めて低いことを表すということになる。これは次のように図示できる。

(59)



完了度0%と100%は、それぞれ、行為等の始動期の開始時点と終了時点を指す。そして、degree H は hardly によって指定される完了度である。この図と(2)とを比べると、前者は後者の一例であることが分かる。また、完了度は完了相を表す助動詞 have(および -en)によって示されるものと考えられる。

ここで、完了度と(開始時点後の)経過時間との関係を考えてみると、語用論的に言って、前者が増すと後者も相対的に増すのである。これは当然のことであるが、重要である。(54)や(55)が、実質的には経過時間の少なさを意味していると解釈されることがあるのは、正に、この関係のためであると思われる。

さて、当該の意味のことを考える際に看過できない形式の例がある。

(60) He had hardly started studying when his mother came home.

この文は、字義どおりに訳すと、「母親が帰ってきたとき彼は勉強を始めたばかりだった」となる(cf. (54))。しかし、通例の解釈は、「彼が勉強を始めるやいなや母親が帰ってきた」というものである。以下、この解釈を「するやいなや」の解釈と呼ぶ。

本節の分析では、前者の解釈から後者の解釈を引き出すのは難しくない。ここで、(60)の形式の文を略式に *Hardly A when B.* と表すことにする。(when の代わりに before が使われることもある。) 上述したように、完了度と経過時間には正の相関がある。したがって、*Hardly A* の部分は、完了度が degree H であること、すなわち、「A が始まってからほとんど時間が経過していない」ことを表す。言い換えると、「Bの直前にAが起こる」ということである。このA、Bの順序を逆に捉えると、「Aの直後に」、すなわち、「Aが起こるやいなやBが起こる」という解釈が得られる。これを(60)に当てはめれば、「するやいなや」の解釈が導き出せる。

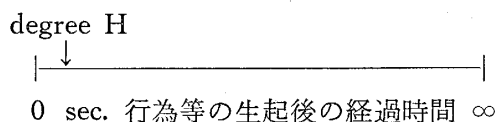
しかしながら、次のような例に関しては今述べた説明が成立しない。

(61) He had hardly passed the exam when he applied for another one.

その理由は、(61)の *Hardly A* の部分、すなわち(58)が、「*A* が起こったばかりだった」という意味をもたないからである。つまり、字義どおりの解釈が無いので字義どおりの解釈から「するやいなや」の解釈を引き出すという方式が使えないのである。にもかかわらず、「彼はその試験に合格するやいなや別な試験に申し込んだ」という「するやいなや」の解釈をもつものである。次にこれについて考えてみよう。

周知のように、「するやいなや」の解釈で使われる *Hardly A when B* の形式の文は、辞書等でイディオムとして扱われるのが通例である。おそらく、(60)のように字義どおりの解釈から「するやいなや」の解釈が引き出せる文がモデルとなり、「するやいなや」の解釈がイディオムとしての意味となったのであろうと考える。すなわち、本来は完了度に基づいて解釈されていた経過時間というものが、完了度から独立して *Hardly A when B* の形式をもつイディオムの意味としてひとり歩きを始めてしまったのであろう (cf. Kajita (1977))。その結果、字義どおりの解釈が成立しない (61) のような文もめでたくイディオムとしての解釈を与えられることになる。(61)の *A* の部分は一時点で捉えることのできる事柄であるので、行為等の「開始」と「終了」が重なっている。したがって、イディオムとしての *Hardly A* の部分は *A* の一時点での生起後の経過時間の少なさを表している。²⁴ これも図示しておこう。

(62)



この図も、(59)と同様に(2)の特別な場合を表している。つまり、イディオムにおいても degree H の意味が保持されているのである。

ところで、一時点で捉えられない行為等が *A* の部分に現れている場合には、いったいどうなるのであろうか。ここでの分析では、イディオムは行為等の生起後の経過時間を問題とするものと考えている。すると、一時点で捉えられない行為等では「開始」を問題とできても「生起」を問題とできないので、経過時間が計れない。したがって、そのような場合にはイディオムとしての解釈はできないはずである。

(63) He had hardly studied when his mother came home.

予測どおり、この例文はイディオムとしての解釈（彼が勉強してしまいうやいなや母親が帰ってきた）を受けず、字義どおりの「母親が帰ってきたとき、（時間的には長くやっていたかもしれないが、）（量的に）ほとんど勉強していなかった」という解釈のみをもつ。²⁵

5. NOT QUITE

hardly が NOT QUITE の語義を与えられる文例には次のようなものがある。

- (64) A year had *hardly* passed. (West) (Cf. (55))
 (65) He is *hardly* strong enough to lift that trunk. (WBD)

これらは *not quite* を用いて次のようにパラフレーズできる。

- (66) A year had *not quite* passed yet.
 (67) He is *not quite* strong enough to lift that trunk.

つまり、それぞれ、「まだ完全には一年が過ぎていなかった」、「彼はその旅行カバンを持ち上げられるほど力が強くない」といった意味をもっている。これらの意味は、「まだ完全に一年が過ぎたわけではなかった」、「彼はその旅行カバンを持ち上げられるほど十分に力が強いわけではない」とも言い換えできる。つまり、「100%(全く)…であるわけではない(例外がある)」という一般的な意味形式をもっているが、この形式は、全体性(全称性)の否定、すなわち部分否定(partial negation)である。

ここで重要なのは、文から *hardly* を除いた部分が行為等の「100%の生起」、すなわち「完結点(saturation point)」を表す場合でないと、NOT QUITE という部分否定の読みが得られないことである。²⁶ したがって、次文も類例である。

- (68) He *hardly* reached the hilltop.
 (69) He *hardly* ran a mile.

それぞれ、*reach the hilltop* と *run a mile* が完全には達成されなかったことを表して、*「彼はぎりぎりのところで丘の頂上にはたどりつかなかった」*、*「彼はぎりぎりのところで1マイル全部は走らなかった」*ということを意味している。ここでも、全体性が否定されている。

これに対して、(15)や(21)(ここに再掲)は NOT QUITE の読みをもたない。

- (15) I *hardly* know him. (Thomson *et al.*)
 (21) She is *hardly* happy.

これらの文から *hardly* を除去した部分は、「知りつくしている」、「最高に幸せである」ということを意味しない。つまり、完結点を表していないので、当該の読みが得られないのである(cf. 第2章)。

しかしながら、(21)と違って次例では NOT QUITE の読みが可能である。

(70) His story is hardly true. (*WBD*)

これは、(be) true が正しさの最上点である「真実」を表しうるからである。

多少難解な例には次のようなものがある。²⁷

(71) A : I heard that John works for the government.

B : (a) Well, he hardly works for it.

(b) He only works at a national university.

B(a)の hardly は、「国立大学は政府の下位機関であり、ジョンはそこで働いているので、間接的には政府のために働いていることになるが、全面的に政府の仕事をしているとは言えない」といった意味合いを産み出している。

not が100%の否定を表すのに対して、準否定語である hardly は degree H (すなわち、100%に極めて近い否定) を表しているので、この否定度の差が、先行の節で扱ってきた全面否定 (total negation) の場合だけでなく、部分否定の場合にも反映されることが予測される。しかし、実際にはほとんど違いが感じられないようである。hardly による部分否定は、not による部分否定と異なり「ぎりぎりの惜しいところまで達している」というニュアンスを伝達する。これは、おそらく hardly のほうが否定度が低い分だけ部分否定の度合も弱くなっているためであろう。²⁸ この推論が正しければ、ここでもやはり hardly は degree H を表していると言える。

6. CERTAINLY NOT

最後に、hardly が CERTAINLY NOT (NOT AT ALL など) という辞書的意味に分類される例について考えよう。

(72) Hardly a mouse was stirring. (*PROG*)

(73) You can hardly blame me if you didn't like the place as you were the one who begged me to take you there. (*LDCE*)

(74) Considering my experience last time, it's hardly surprising that I've stayed away. (*COB*)

(75) His conduct hardly corresponded with the dignity of his position. (*UDEL*)

(76) I will hardly need to remind you to be polite to your grandmother. (*COB*)

(77) This is hardly the time for buying new clothes. I've only got just enough money for food. (*LDCE*)

まず、各例文の文字どおりの意味が、これまで議論してきた辞書的意味のどれに相当するかを見ることにする。(72)は(8)と、(73)は(12)と、(74)は(21)と、(75)は(23)とそれぞれ同様な例であり、すべて ALMOST NOT に属す。(76)は(28)の類例であり、PROBABLY NOT に分類される。(77)は

(67)と類を成すので、NOT QUITE に入る。これらの例は、degree H の意味で使われるものであるが、文脈しだいで、(CERTAINLY NOT など表される) 100%の否定を伝達するのである。これは、いわゆる緩叙法 (litotes) であり、控えめな言い方をしてかえってそうでない場合よりも強い印象を与える効果がある (cf. *UDEL*)。この効果によって、単なる否定というよりは、むしろ 100% の否定であることを強調するような意味が伝わることになる。³⁰ 文脈によって、皮肉 (irony) になったり、誇張 (hyperbole) になったりする (cf. 安井 (1978))。(73), (75), (76)は前者に属し、(72), (74), (77)は後者に属すと思われる。

さて、発話者が当該用法の *hardly* を使う場合、その文字どおりの意味が CERTAINLY NOT であると思っているわけではない。かえって、degree H であることを百も承知しているのである。さもなければ、緩叙法とはならない。するとやはり、*hardly* は文字どおりには degree H を表していると言える。そして、緩叙法の効果によって、実質的には 100 の否定という語用論的意味が伝達されるという仕組みになっている。³¹

7. おわりに

以上本稿では、辞書等に見られる否定の *hardly* の多義性について論じてきた。主たる論点は、5つに分けて考えてきた語義が、どれも基本的には degree H、すなわち(1)および(2)に示した意味に還元できることを証明することにあつた。議論の細部に関してはまだまだ試論の域を出ていないところがあるが、大すじではこの目的を達成できたものと期待している。結局のところ、*hardly* は度合を表す副詞 (付加詞) である、という Poutsma (1928, VIII. 52) などの見解の裏づけをしたと言ってもよいであろう。また、随所で、否定辞 *not* と準否定語である *hardly* のふるまいや分布の共通性に言及したが、これは、陳腐に聞えるであろうが、*hardly* が基本的には否定語として扱われるべきである、ということを示唆しているものと考えられる。

今後の課題としては、動詞(句)あるいは文全体がどのような特徴をもっているときに *hardly* がどの辞書的意味に分類されるのかをより正確かつ詳細に記述しなければならない。また、同義語あるいは類似語として扱われる *scarcely* や *barely* などについても、(かなりの部分はそのまま応用できるものと予想されるが) 同様な検討を加える必要がある。

最後に、本論考が、将来、英語教育における *hardly* 等の教授法を考えたり、辞書の記載事項を改訂したり簡素化したりするときのヒントにでもなれば幸いである。

注

* 本稿を書くにあたり、インフォーマントとして次の方々にお世話になった。Diane Butler, Norman Butler, Paul Davenport, Beth Higgins, Robert Rolf の諸氏である。ここに記して謝辞としたい。なお、不備なところがあれば著者の不明によることは言うまでもない。

1. 「～」は否定 (not) を表す論理記号である。

また、太田氏 (1980, 433-434) は、hardly と共起できる形容詞は [+polar] (「到達点や極点をもつ」という意味) であり、例えば dead は [+polar] であるのに対して、alive, old は [-polar] であると言っている。しかし、事実はこの予測と食い違っている。

- (i) a. *He is hardly dead.
- b. He is hardly alive.
- c. He is hardly old.

後述するように、hardly と共起する形容詞は段階的概念を表すものに限られている。通常の解釈では一状態しか表さない dead は hardly と共起できないものと思われる。詳しくは、第1節および第2節を参照されたい。

2. 本稿では、次のような、hardly の肯定的な意味は扱わない。

- (i) What is made is slowly, hardly, and honestly earned. (Fowler)
- (ii) Thing may go hardly with us before the war is over. (WEB)

これらの文中での hardly は形容詞 hard (困難な、厳しい) の意味をそのまま受け継いでいると思われる。(i)では with difficult の意味で用いられ、(ii)では harshly の意味で用いられている。どちらの用法も現代英語ではまれである (cf. Fowler (1983), West (1965))。

3. スモール・キャピタルの表記は単語そのものではなく意味を表すものとする。

4. (9)に対して(i)も存在する。

- (i) Bob hardly takes any exercise. (Alexander)

インフォーマントによれば、hardly の位置は (i) よりも (9) のほうがより密接に感じられるが実質的な意味の差はないということである。この密接さの違いは、次の(ii), (iii)の差に準ずるものと思われる。

- (ii) Bob doesn't take any exercise.
- (iii) Bob takes no exercise.

hardly の位置は、原則として被修飾語句の直前であるが、助動詞を修飾する場合にはその直後である (cf. Poutsma (1928, VIII. 52))。

5. (11)は(i)の意味で用いられることがあるが、これについては第3節を参照のこと。

- (i) It is unlikely that he goes to the meeting.

6. 柴川氏(1985, 73) は, 能力の *can* が使われている例について本稿とは異なる見解を採っている。

- (i) He could hardly run, because he was wounded.

この例は, 彼の走り方は「*run* の標準的な意味の中に属するか属さないかのぎりぎりの状態で」「ぎこちなかった」ということを意味していると述べている。すなわち, *hardly* が *run* を修飾していると考えているのであろう。

しかし, 実は(2)と同様に (i) においても, *hardly* は助動詞を修飾して, 走る能力が低下していたという意味を伝えると考えられる。もし *hardly* が *run* を修飾するのであれば, 下の(ii)は「ぎこちなく走った」という意味をもつものと予想される。

- (ii) He hardly ran.

ところが, (ii)は(iii), すなわち「ほとんど走らなかった」という意味なのである。

- (iii) He ran very little.

これに関しては, (24—26)についての議論を参照されたい。

ついでながら, (ii)が(iii)を意味するのだから, (i)の主節は(iv) a だけでなく(iv) b の意味ももてるはずであるが, 通常(i)は(iv) a だけを意味する。

- (iv) a. It was almost impossible for me to run.
b. It was possible for me to run very little.

この理由に関しては, 今のところよく分からない。

7. 動詞の分類は主に Vendler (1967) による。Cf. Bennett and Partee (1978), 安藤 (1983)。

8. *hardly* は準否定語であるので *not* と似ているところがある (注4, 注17, 第3章を参照されたい)。ところが, *hardly* は副詞であり否定辞ではないので違いもあることが予想される。

- (i) a. I hardly love him. (= (17))
b. *I not love him.

- c. I do not love him.
 (ii) a. I do not love him very much.
 b. *I hardly love him very much.

(i)に見られるように、not が動詞句あるいは文を修飾する場合には「do によるささえ (*do-support*)」を受けなければならないが、hardly はそうではない。また、(ii) a では not が very much に係るが、(ii) b の hardly は、(a)の not と同様な位置にありながら very much に係らない。そればかりか非文が生じてしまう。(b)が許容されない理由は、hardly と very much がどちらも愛情の度合を表していること、すなわち、同一の意味的役割を担う要素が文中に2つ出現していることであると思われる。また、これらがお互いに反対の度合を表すので許容されないのではないかと思うかもしれないが、正の度合を表す要素が2つ表れてもやはり許容されないので、この考え方は正しくないことが分かる。

- (iii) *I deeply love him very much.

9. (2)の hardly が肯定的意味をもつ場合は扱わない。注2の(ii)参照。

10. 「活動量」はその活動に要する「経過時間」と正の相関があると考えられる。そして、実際的には、「頻度」とも正の相関をもつ場合もありうる。だからと言って、hardly を頻度の副詞と考えて、(2)を「めっため勉強しなかった」と解釈するのは正しくない (cf. 中右 (1980))。もっとも、文脈によっては、(2)の hardly が hardly ever の ever を省略したものと理解されて、「めったに勉強しなかった」ということを意味する場合がある。

11. モダリティについては、Fillmore(1968), Halliday (1967), 中右(1979)などを参照されたい。ここでは、中右 (1981, 242) の定義を引用しておく。

- (i) 命題 (内容) とは、現実世界におけるある特定の状況 (出来事, 状態, 行為, 過程など) を叙述したものであるのに対し、モダリティとは、発話時という瞬時的現在において、その状況に対し話し手 (および時に聞き手) が示す心理的反応を叙述したものである。

12. (1)の can は能力を表す非認知的 (non-epistemic) 用法であり、(2)の can は可能性を表す認知的 (epistemic) 用法である。次のような文はこの点曖昧であり、(ii) のどちらの意味でも使える。(a)は前者、(b)は後者の読みである。

- (i) John can hardly be an athlete.
 (ii) a. John is almost incapable of being an athlete.

b. It is rather unlikely that John is an athlete.

13. この議論が正しいとすると、柴川氏(1985)の見解は正しくないことになる。柴川氏は、*hardly* が *almost not* と *probably not* の意味をもつと述べている。

14. 詳しくは、Lasnik(1976), Jackendoff(1972), 中右(1980)などを参照のこと。

15. (37)の(a)と(c)は同義であるが、(36)の(a) (驚いたことに、彼は今夜来ません) と(b) (驚くまでもないですが、彼は今夜来ます) は同義ではないという違いもある。

16. (39) a は(36) b に比べて容認度が低いのであるが、これは *-ly* で終わる語が連続していることによるものと考えられる(cf. (4))。同形式語の反復は、一般に、文の容認度を下げる傾向があることはよく知られている (cf. Ross (1972), Shibatani (1973), etc.)。

17. 蓋然性の法助動詞等であっても、論理的必然性(強い確信)を表す場合の *must* は *hardly* によって修飾されない。

(i) *He must hardly have arrived there.

これは *not* のふるまいに準ずるものである。

(ii) *He must not have arrived there.

Cf. He cannot have arrived there.

must not は、通例、非認識的な「禁止」の意味しか表さないので、(ii)は非文となる (cf. 安藤 (1983, 221) など)。(iii)には「禁止」の読みしかない。

(iii) You must not go there alone.

(iv)は、これに準じて許容されてもよさそうに思われるかもしれないが、一般的に許容されない。

(iv) *You must hardly go there alone.

これは、「禁止」が程度を表す概念ではないので、度合を表す *hardly* と折り合わないためであろう。

18. このような解体の仕方は中右氏 (1984 b) の分析に沿うものである。S₂ の主節の

will は予言を表し, S₁ の will は未来(性)を表している。

19. 可能性を表す can が肯定平叙文に用いられるのは有標であるらしく, あまり実例がないようである (cf. 安藤 (1983, 176))。OALD には例外的に例が挙げられている。

(i) One of the prisoners escaped yesterday. He can be anywhere by now.

20. I think がモダリティを表すときには, 「私は…と思う」という意味になり, 「私は…と思っている」ではない。詳しくは中右 (1979) を見られたい。

21. (6)に対して(i)のパラフレーズも可能である。

(i) I hardly think that he is an idiot.

(ii)と(iii)が等価であることから(i)と(53)も等価であると言える。

(ii) I hardly think so.

(iii) I think it unlikely.

22. (54), (55)などの例には次節の NOT QUITE の読みも可能である。文脈が与えられていない場合には, 一般的に, NOT QUITE の読みのほうが ONLY JUST の読みよりも得やすいようである。

23. 次の文は柴川 (1985) から引用したものである。

(i) I hoped he would get an A in this course, but he hardly passed the final exam.

「ぎりぎりのところで合格した」という意味であると言う。この用法は辞書等には見られなかったがこれを認めるインフォーマントもいる。ただし, あらたまった用法ではないようである。通例, この意味を伝えるには barely を用いる。

(ii) He barely passed the final exam.

この hardly は hardly のほかの意味と同一線上で捉えることができるものと思われるが, ここでは特殊用法であるとして議論には入れないことにする。

24. (60)のAの部分も一時点で捉えることができるが、そのときはイディオムの解釈が可能である。

また、(i)のような例の場合も二義的であり、次節の NOT QUITE という字義通りの読みとイディオムの読みがともに可能である。

(i) We had *hardly* reached the lake when it started raining. (RHD)

前者の場合「雨が降りだしたとき、我々はぎりぎりのところでまだ湖に着いていなかった」という意味になり、後者の場合「我々が湖に着くやいなや雨が降りだした」となる。

このように意味に多義性がある場合、文脈がないと、一般に、イディオムとして解釈されやすいようである。

25. 状態動詞も、(63)の活動動詞の場合と同様にイディオムとしての解釈を許さないようである。

(i) I had *hardly* lived here when I first met you.

すなわち、「あなたに初めて会ったとき、私はまだここにほんの短期間しか住んでいなかった」という意味は可能であるが、「住むという行為が終わるやいなやあなたに会った」などという意味にはならない。live は一時点では捉えることができないからである。

ところで、次のような例は、一見したところ今見た一般化の反例になると思われるかもしれない。というのは、状態動詞の *be* が現れているからである。

(i) We were *hardly* seated when the fire broke out. (AHD)

しかし、これは反例とはならないのである。実は、Aの部分独立して用いられると「座っていた」と「腰をかけた」とに二義的であり、後者の場合には一時点で捉えることのできる行為を表しているので(i)にイディオムの解釈を与えうるのである。

26. Vendler (1976) の分類では、完成 (accomplishment) 動詞と達成 (achievement) 動詞のあるものが「完結点」をもつ意味を表すと思われる。行為が完結点をもつ場合の特徴の一つは、行為等の遂行の所要時間を問題にできることであるようである。

(i) A : How long did it take you to reach the hilltop.

B : It took me two hours. / I did it in two hours.

27. (71)B(a)の *hardly* は、文脈によっては次節の CERTAINLY NOT や PROBABLY NOT の意味にもなる。

28. 部分否定を論理式で表すと(i)のようになる。

$$(i) \sim A_x S \equiv \exists_x \sim S$$

また, *hardly* には次の関係式が成り立つ。

$$(ii) \text{ HARDLY } P \equiv \text{ALMOST } \sim P$$

ここで, (i)の \sim は100%の否定であるので *hardly* による否定と入れ換え, (i)の $A_x S$ の部分を(ii)の P に対応させると次式が得られる。

$$(iii) \text{ HARDLY } \forall_x S \equiv \text{ALMOST } \sim \forall_x S \equiv \text{ALMOST } \exists_x \sim S$$

すなわち, (i)の右辺が「 S の成立しない場合が存在すると確信をもって言える」といった意味であるのに対して, (iii)の最終辺は「 S の成立しない場合が存在するとかんがりの確信をもって言える」といった意味である。(ii)や(iii)の表記法はこの場限りの目的で作り上げたものであることを断っておく。

29. (73)の *can* は非認識的用法の一つの「行動の自由」を表している。そして, *hardly* がこの *can* を修飾することによって「問題の行動の自由がない」という意味になる。「自由がないのに無理にやれば道理にはずれる」, すなわち, 「道理にはずれることなく(正当に)問題の行動の自由を行使することはできない」ということになる。(73)のような文での *hardly* の意味が辞書等 (e.g. *LDCE*, *OALD*) で NOT REASONABLY などと定義されていることがあるが, 今見た推論でそのことがうなずけよう。

30. (72)–(76)では degree H (100%に近い否定) が実質的に100%の否定を伝えるわけであるが, (77)では *hardly* による部分否定 (0%に近い否定となるのではないと思われる) が100%の否定となるという違いがある。

また, (76)のように, 予言を表す *will* などに対しても *hardly* を緩叙法で使えることに注意しておきたい。この文は「蓋然性の度合が0である」, すなわち, 「ありえない」ということを表している。なお, (76)で *hardly* が *need* にかかる可能性もあるが, それについては, 注5および(13)を参照されたい。

31. 当該用法の *hardly* がさらに進んで, *not* そのものと同じ意味用法をもっていると思われる例がある (Paul Davenport 氏 (私的照会) による)。

- (i) A : I suppose you always eat at that restaurant.
B : Oh, hardly "always" : only about twice a week.

この用法の hardly は degree H の文字どおりの読みはもちえないが、効果としては、本文で見た緩叙法である。すなわち、控えめな意味のことを言うことによる緩叙法ではなく、控えめな意味をもつ単語を使うことによる緩叙法であると考えられる。

略 語 — 覧

- AHD *The American Heritage Dictionary of the English Language*. 1976.
 COB *Collins Cobuild English Language Dictionary*. 1987.
 COL *Collins Dictionary of the English Language*. 1979.
 LDCE *Longman Dictionary of Contemporary English*. 1987².
 LH *Kenkyusha's Lighthouse English-Japanese Dictionary*. 1984.
 OALD *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 1974³.
 PROG *Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary*. 1987².
 RHD *The Random House Dictionary of the English Language*. 1987².
 UDEL *The Universal Dictionary of the English Language*. 1952². (Toppan, 1976)
 WBD *The World Book Dictionary*. 1980.
 WEB *Webster's Third New International Dictionary of the English Language*. 1961³.
 (本文あるいは注で言及されていない辞書の記載は省略する。)

参 考 文 献

- Alexander, L. G. *et al.*, 1975, *English Grammatical Structure*. London: Longman.
 安藤貞雄, 1983, 『英語教師の文法研究』. 東京: 大修館書店.
 Bennett, M. & B. Partee, 1978, "Toward the logic of tense and aspect in English." Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
 Fillmore, C. J., 1968, "The case for case." In E. Bach & R. T. Harms eds. *Universals in Linguistic Theory*. 1-88. New York: Holt.
 Fowler, H. W., 1983, *A Dictionary of Modern English Usage*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
 Halliday, M. A. K., 1967, "Notes on transitivity and theme, part 2." *JL* 3. 199-244.
 Hornby, A. S., 1975, *Guide to Patterns and Usage in English*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
 Jackendoff, R. S., 1972, *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
 Kajita, M., 1977, "Toward a dynamic model of syntax." *SEL* 5. 44-76. Tokyo: Asahishuppansha.
 Kiparsky, P. & C. Kiparsky, 1971, "Fact." In D.D. Steinberg & L.A. Jakobovits eds. *Semantics*. 345-369. Cambridge: Cambridge University Press.
 Lasnik, H., 1976, *Analyses of Negation*. Reproduced by the Indiana University Linguistics Club.
 中右 実, 1979, 「モダリティと命題」. 『英語と日本語と』. 東京: くろしお出版.
 ———, 1980, 「文副詞の比較」. 国廣哲彌編『日英語比較講座 第2巻 文法』. 159-219, 東京:

- 大修館書店.
- , 1981, 「モダリティと命題——英語挿入節の場合」. 『現代の英語学』. 239-250. 東京: 開拓社.
- , 1984 a, 「意味論の原理 (4)」. 『英語青年』. CXXX: 4. 184-186. 東京: 研究社出版.
- , 1984 b, 「意味論の原理 (9)」. 『英語青年』. CXXX: 9. 442-444. 東京: 研究社出版.
- 太田 朗, 1980, 『否定の意味』. 東京: 大修館書店.
- Poutsuma, H., 1928, *A Grammar of Late Modern English. Part 1. The Sentence*. Second edition. Groningen: P. Noordhoff.
- Ross, J. R., 1972, "Double-ing." *LI* 3. 61-86.
- 柴川 薫, 1985, 「程度・焦点化副詞の浮き彫り効果について」. 『筑波英語教育』第6号. 69-76. 筑波英語教育学会.
- Shibatani, M., 1973, "Semantics of Japanese causativation." *FL* 9. 327-373.
- Swan, M., 1980, *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Thomson, A. J. & A. V. Martinet, 1986, *A Practical English Grammar*. Fourth edition. Oxford: Oxford University Press.
- Vendler, Z., 1967, *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.
- West, M. comp. and ed., 1953, *A General Service List of English Words*. London: Longman.
- 安井 稔, 1978, 『言外の意味』. 東京: 研究社出版.